「ほんのまくら 2017」解答リスト　～武蔵野台図書館～

No	本のまくら	本のタイトル	著者	出版社	分類
1	今、私の目の前に一つのトビラがあった。 ・・・・子供の頃から、私は、ずっとただ一つのトビラを探していた。	タダイマトビラ	村田沙耶香	新潮社	913.6
2	(さいっあく)室井さつきはかじかむ手に息を吐きかけた。(最悪、最悪、最悪)オーバーのフードを深くかぶり直し、前方をうらみがましく見る。	向かい風で飛べ！	乾ルカ	中央公論新社	913.6
3	南に面した窓の鎧戸の隙間が、うす青い横縞を作っている。遠く近く、鳥のさえずりが聞こえる。薄氷のような夜を溶かして、まもなく夜明けが訪れる。	ジヴェルニーの食卓	原田マハ	集英社	913.6
4	台風の前触れなる小雨の中を、朝十一時発のエアフランスに乗るため羽田に向う。日曜だというのに田中絹代さん、笠置シヅ子さん、小林トシ子さん、八千草薫さん、その他多数のお友達に送られて、TVキャメラのライトやスピグラ[スピードグラフィック、木製ボディの大判カメラ]にかこまれてカットとってる間に早くも時間。	ヨーロッパ二人三脚　旅日記	高峰秀子	筑摩書房	915.6
5	ここに、しらじらと青い空気をまとった一枚の絵がある。画面に広がるのは、翼を広げて飛び立とうとするペガサス、その首に植物の蔓を投げる裸婦、彼女の足もとで花をつむ裸の少年。	楽園のカンヴァス	原田マハ	新潮社	913.6
6	わたしがこどもだったころの一時期、親は『スパルタ教育　強い子どもに育てる本』と『女の子の躾け方　やさしい子どもに育てる本』に傾倒していた。前者は石原慎太郎氏の手になるもので、後者は浜尾実の著書である。どちらも当時大ベストセラーだったはずだ。なぜなら、わたしの親の買う本はベストセラーか芥川賞受賞作品だったからだ。	泥酔懺悔	朝倉かすみ ほか	筑摩書房	914.6
7	「―ようございます。お引き受けいたしましょう」限りなく〈よござんす〉に近い発音でその小柄な老婦人は言った。背筋はぴしりと伸ばされ、両の手は膝の上にきちんと揃えられ、和服を着ていることもあって、ずしりとした風格がある。なんだか時代劇に出てくる、やんごとない身分の女性のようだ。	虹の家のアリス	加納朋子	文藝春秋	913.6
8	プロローグ　こんな夜を見下ろして、宝石箱、とか言っちゃう奴。地上から訊きたい。夜は綺麗か？	あしたはひとりにしてくれ	竹宮ゆゆこ	文藝春秋	913.6
9	十月二日で、四十六歳になった。森村朋美は、洗面台の三面鏡に映る自分の顔を、目を凝らして見つめた。目尻の笑い皺が深くなったかもしれない。	だから荒野	桐野夏生	文藝春秋	913.6
10	国道沿いをしばらく進んだ後、交差点を左に折れた。手押し車を押すばあちゃんは、迷っている様子がなく、地理はちゃんと覚えているようだった。	ひかりの魔女	山本甲士	双葉社	913.6
11	陽が落ちると、燃え立つばかりだった紅葉の森は色を失い、薄闇の中にもみじ葉の赤黒さだけが取り残された。	千年樹	荻原浩	集英社	913.6
12	新しい教室の窓際の席からは、空のプールがよく見える。昨日まで降り続いた雨のせいで、うっすらと底に水がたまり、その上には校庭から吹き飛ばされてきた桜の花びらがふかふかと積もっていた。	本屋さんのダイアナ	柚木麻子	新潮社	913.6
13	私たちは、自分とは別のカテゴリーにいる人間に対する時、相手の心情を推し測る。たとえば、高齢者というものはこうしてほしいものだとか、こういうことを嫌うものだとか、子供はこういうことを喜ぶものだとかだ。それは、「推し測る」というより、「こうに決まっている」との思い込みに近い場合がよくある。	言わなかった言わなかった	内館牧子	幻冬舎	914.6
14	サラリーマンが酒場で話す話題はおおむね決まっている。仕事の話か、上役の悪口か、あるいはプロ野球の戦評、競馬の予想、ゴルフ談義に魚釣りの自慢、まれには女の噂に花が咲くこともある。そんな雑多の話題を当たり障りのない範囲で論じあううちに酔いが廻り、時間がたち、あとは歌でも歌っておひらきになる。	電話ミステリー倶楽部	ミステリー文学資料館	光文社	913.68

15	トンネルの中に、九月のぬるい風がそよいでいる。どこから来て、どこに行く風なのだろう。顔に吹きつける風に、的場哲也は目を細めた。	東京ダンジョン	福田和代	PHP研究所	913.6
16	仕事から帰ってくる。携帯電話料金の支払い請求書をポストの中に見つける。「払わなきゃ」と反射的に思うが、仕事の都合上帰宅時間はいつも遅く、今日も既に夜中の十二時を回ってしまっている。	そして生活はつづく	星野源	文藝春秋	914.6
17	人間、死ななっかたらとんでもないことになる。必ず死ぬことがわかっているから、人は毎日生きていられる。永久に死ななかったらたいへん。年をとるから、若い時代が楽しいし、死ぬことはほんとにありがたいことだ。	生きているのはひまつぶし	深沢七郎	光文社	913.6
18	ぼくのクラスには天使がいる。天使のように可愛いという比喩じゃなく、正真正銘、本物の天使だ。星月優花というなんだか芸能人みたいな名前をした彼女は、その字面ほどではないけどけっこう可愛く、表情の動きが魅力的で、笑顔はぱっと光ような華があり―　背中から、大きな白い翼を伸ばしている。	天使は奇跡を希う	七月隆文	文藝春秋	913.6
19	サリマの仕事は夜が明けきらないうちから始まり、昼近くに帰宅した。家につくと洋服をむしり取って裸になり、すぐにシャワーを浴びた。この習慣は仕事を始めてからついてしまったもので、昼のさなかからたっぷりとお湯をつかってからだを洗うなんて贅沢を覚えた自分に腹を立てた。	さようなら、オレンジ	岩城けい	筑摩書房	913.6
20	鈍色に変化した煉瓦造りの古い一軒家は、昔はきっと赤かったのだろう屋根に蔦を這わせて建っていた。木でできた重い扉を開けると、いらっしゃいませ、とあたたかい声がした。中から現れたマダムの笑顔にほっとして初めて、私は自分が緊張していたことを知った	誰かが足りない	宮下奈都	双葉社	913.6
21	半年前から、玄関で寝ている。いわゆる郊外ベッドタウンにある我が家はそれなりに余裕を持った造りで、三和土を上がったところに、玄関ホールとはとても呼べないものの、シングル布団ならどうにか敷けるくらいの空間がある。もちろんそこは寝るための場所ではないけれど、わたしはずっと布団を敷きっぱなしにしていた。	流れ星が消えないうちに	橋本紡	新潮社	913.6
22	「最近、キュンとくる男子っていないよね～」と、言っている女友達に会うと不思議でなりません。だって、世界はこんなにもたくさんのキュンであふれているというのに！あるときは歩道で。またあるときは電車の中で。	キュンとしちゃだめですか？	益田ミリ	文藝春秋	914.6
23	「結婚する前に、ひとつだけ頼みたいことがあるんだ」いつものように口のはじに笑みを浮かべながら、だけど眉毛を少しだけ下げて和成は切り出した。ひとつだけ頼みたいこと。	眠らないため息	大沼紀子 ほか	幻冬舎	913.68
24	この物語は、わが友シャーロック・ホームズの輝かしい経歴に傷をつけるような結果になるかもしれない。しかし、私の余命はもう幾ばくもない。	シャーロック・ホームズたちの冒険	中啓文	東京創元社	913.6
25	二十代の初めから中ごろ、私はものすごく貧乏でした。フリーライターの真似事のようなものをしていたのだけど、仕事もなく、当時手伝っていた喫茶店も儲からず、夜中スナックの皿洗いのバイトをしていました。	この話、続けてもいいですか。	西加奈子	筑摩書房	914.6
26	わたしが知らなかったこと--- 真っ暗な木の箱のなかで目をさましたとき、はじめは現実とは思えない。もちろん蓋を押してみる。当然だ。拳で箱の側面を叩き、底に踵を打ちつける。痛みにもかまわず頭を何度もぶつける。それから大声をあげる。繰りかえし叫ぶ。	棺の女	リサ　ガードナー	小学館	933
27	先日、ある女性雑誌から、おしゃれの基本について書いてくれ、と頼まれた。その時は、興味がなかったので断ったが、それにしてもおしゃれに基本なんてあるのかしら。もしあるとすれば、虚栄心ではないのか。	ほんもの　白洲次郎のことなど	白洲正子	新潮社	914.6
28	船酔い独特の苦い生あくびが、治彦の頬を何度もふくらませた。きっかけは、海に落ちた自分の帽子をタモ網ですくおうとしたことだった。	海の子	ドリアン助川	ポプラ社	913.6
29	杉並の静かな住宅街の路地の中で、兄と妹が、門のわきに駐めた中古自動車をせっせと洗っていた。兄がたわしバケツにつけて、粉石鹸をまぶし、ごしごしタイヤの泥をこすり落とすと、緑色のホースの先を握った妹が、いきおいよく、その上に水をそそぎかける。	ぽんこつ	阿川弘之	筑摩書房	913.6

30	ぼくの師匠は心臓が悪い。これまで二度、心筋梗塞の発作を起こしている。軽く済んだからよかったようなものの、二度あることは三度ある。三度目の正直という喩どおり、周辺はそれを警戒し心配もしているのだが、本人は頻繁に地方へ出て行き、独演会の手を緩めない。	師匠！	立川談四楼	PHP研究所	913.6
31	嫌いな言葉のひとつに、境界線、っていうのがある。「国境なき医師団」なんていうけれど、わざわざ「国境なき」と謳わなければならないほどに、きっと境界線というのは人間にとって普通に存在するものなんだろう。	独立記念日	原田マハ	PHP研究所	913.6
32	せかせかと忙しない足音が耳朶に響いて、おあいは包丁を持つ手を止めた。顎を上げて台所の小窓に顔を向ける。ついさっきまでは頬に陽射しの温もりを感じていたのに日が傾いたのだろう、夕風が額を撫でる。	阿蘭陀西鶴	朝井まかて	講談社	913.6
33	失業したとたんにツキがまわってきた。というのは、あるいは正確な言い方ではないかもしれぬが、それはそれでかまわない。第一、なにも正確に物語ることがぼくの目的ではないし、第二、たぶんこちらの方が重要なのだが、ぼくは並外れて縁起をかつぐ人間である。	永遠の1／2	佐藤正午	小学館	913.6
34	霧の中に大障子避難小屋が見えたので、パーティの足は、自然とその入り口の方へ向かって行った。戸はすぐ開いた。暗い穴倉の中を覗くような格好で、リーダーの華村敏夫は小屋の内部を見回した。	雪の炎	新田次郎	光文社	913.6
35	初めて自分の店を持ったとき、私は、若い画家の絵を一つ買った。施術室の壁が、殺風景だと思ったのだ。花を飾ってもいいが、お金と水替えの手間がかかる。	神様のケーキを頬ばるまで	彩瀬まる	光文社	9136
36	静まり返った室内に、かつん、かつんという木沓の音が高く響いた。床を叩く鋭い音には、明確な怒気が含まれている。横一列に並んだ女官たちが、申し合わせたように首をすくめてうつむいた。	夢も定かに	澤田瞳子	中央公論新社	913.6
37	昭和8年12月22日　体の半分ほどもある大きな風呂敷包みを背負い、すずが海沿いの道を歩いている。右手に広がる干潟の手前で、蟹でも見つけたのだろうか、二羽のサギが泥をついばんでいる。	この世界の片隅に ノベライズ	こうの史代	双葉社	913.6
38	空がすっきりと晴れ上がっていた。今年最後の牧草を刈り入れて、集落の空気も凪いでいる。十月。秋を渡る風は、収穫を終えた十勝平野に鮮やかな色を連れてくる。	氷平線	桜木紫乃	文藝春秋	913.6
39	「また赤ちゃんの置き去りですねぇ」昼食のあと、新聞をひろげていた吉村サキが溜め息をついた。「保護責任者遺棄の疑いで逮捕された主婦が、赤ん坊がいたら離婚する時不利になると思ったと供述していると･･･何という身勝手な動機でしょう！」	いえない時間	夏樹静子	光文社	913.6
40	風のない夜、釧路署生活安全課に捜索願が届いた。『小学校四年、水谷貢、男児、失踪時は青いTシャツとジーンズ姿、黒の運動靴を着用』市内の小学校が夏休みに入った日だった。	凍原	桜木紫乃	小学館	913.6
41	青葉もようやくその肌に硬みを加えてきた頃、私は湘南の片瀬に、恩師木村博士を訪れた。博士は、その痩軀に、まだわれわれ若い者をして、充分信頼せしめるに足る鋭さと、情熱とをもって、母校×××大学、土木工学科に教鞭を執っていた。	THE密室	飛鳥高他	実業之日本社	913.6
42	十月二日で、四十六歳になった。森村朋美は、洗面台の三面鏡に映る自分の顔を、目を凝らして見つめた。目尻の笑い皺が深くなったかもしれない。口角も下がった気がする。ほうれい線が目立つのはそのせいだろう。	だから荒野	桐野夏生	文藝春秋	913.6
43	いい波だった。灰色の空の下で、空より昏い海が騒いでいる。遠くの水平線はまるで山脈だ。海岸に迫る隆起はみるみる膨らんで高い壁になり、浜辺のずっと手前で砕けた。	僕たちの戦争	荻原浩	双葉社	913.6
44	長男光が、知的な障害を持っていること、そして私ら家族が、かれの作る音楽を楽しみに、なんとか静かに暮らしてきたことは、たびたび書きました。なんとかというのは、次つぎに困難は起こり、かつ乗り越えらたからです。	定義集	大江健三郎	朝日新聞出版	914.6

45	市の文化センターでやっていたそのコンサートをぼくが聴いたのは、たまたまセンターの前を歩いていて、今日の出し物を知らせるコーナーに貼ってあったポスターが目にとまったからだった。アマオケか。	オケ老人！	荒木源	小学館	913.6
46	何気なく引き出した「ピーターパン」の本の中から、ひらり、と一枚の写真が落ちてきた。来夏は、その写真を拾う。小学生のときの。笑った自分の写真だった。こんな表情で写っているのは珍しい。	谷中レトロカメラ店の謎日和	柊サナカ	宝島社	.913.6
47	三月、長野の春はまだ遠かった。蔭山康則は白髪交じりの顎鬚に触れながら、周りを見渡した。信越本線、槇原駅のホームには大勢の子供たちがいた。	リバース	五十嵐貴久	幻冬舎	913.6
48	ドスドスドスドスドスドスドス。ギュイーン、ギュルルルルル。腹に響くバスドラの連打に乗って、リードギターがのたうちまわるようなフレーズを奏でる。多少もたついたり、揃わなかったりするところがないでもないが、その都度強引に立て直す。	ヘビメタ中年！	荒木源	小学館	913.6
49	「あなたが殺したのは間違いない。‥‥そうですね？」僕が言っても、男は表情を変えない。上下黒のトレーナーを着、だらけたように、身体を椅子にあずけている。透明なアクリル板が間になければ、僕は恐怖を感じただろうか？頬が削げ、目がやや落ち窪んでいる。	去年の冬、きみと別れ	中村文則	幻冬舎	913.6
50	何につけ、あとから氣の付くことの多い私も、かねて見知り越しの婦人が、在りし日の三島由紀夫の恋を享けた人であると聞いたときには、戯談ではない、驚くよりも呆れが礼に来たことをおぼえている。	直面（ヒタメン）　三島由紀夫若き日の恋	岩下尚史	文藝春秋	910.268
51	むかしむかし。といっても、それほどむかしではないのである。京都の街に怪人が現れた。そいつは虫喰い穴のあいた旧制高校のマントに身を包み、ステキにかわいい狸のお面をつけていた。	聖なる怠け者の冒険	森見登美彦	朝日新聞出版	913.6
52	仁木順平はカタツムリの夢を見ていた。カタツムリといっても、そこは夢のことだから、尋常な大きさではない。渦巻き状になったカラは、二階建ての家ほどもある。	螺旋階段のアリス	加納朋子	文藝春秋	913.6
53	「お待たせしました」注文したコーヒーをテーブルに置いたのは、細長い指をした男性店員だった。—左利きなのかしら。片岡絵真は、カウンターのほうへ戻って行く男性店員の後ろ姿を見ながら思った。カウンターでドリップ式のコーヒーをいれていたときも、手首にシルバーのバングルのはまった左手で静かに湯を注いでいた。	神様からの手紙喫茶ポスト	新津きよみ	角川春樹事務所	913.6
54	歩みを進めると。足下の雪が鳴いた。登瀬は、音に耳を添わせて数を唱えはじめる。—ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう。つぶやく声が、等しい間合いをとって足音に重なっていく。	櫛挽道守	木内昇	集英社	913.6
55	ある時期には、たとえば小林秀雄や河上徹太郎たち文壇の主流から「大衆文学作家」と評価され、敬遠されていたことがあった夏目漱石が、いまは“文豪”と呼ばれ国民的作家になっている。	漱石先生、探偵ぞなもし	半藤一利	PHP研究所	910.268
56	大きな太陽は、紫の空で深紅の光を放っていた。褐色の平原には褐色の草むらがちらばり、そのはずれには赤い森が横たわっていた。マックガリーはそれを目ざして歩いた。	さあ、気ちがいになりなさい	フレドリック　ブラウン	早川書房	933
57	その人物に会ったのは、一九九九年の七月のことである。 一九九九年七月と聞いて、「ノストラダムスの大予言」を思い出す人は、僕とそう年代が変わらないか、はたまた相当なオカルト好きだと推測する。	イヤミス短篇集	真梨幸子	講談社	913.6
58	疑う夫婦 「ねえ、あなた、これ、隣のお兄さんじゃないかしら」リビングテーブルに座る若林絵美がテレビを眺めながら、夫の順一に言った。	首折り男のための協奏曲	伊坂幸太郎	新潮社	913.6
59	私は、壁の絵を見ている。彼の頭の後ろに掛かっている絵を見ている。それはひとえに私が退屈しているからなのであるが、彼はいっこうにそのことに気が付いてくれない。	私（わたし）の家では何も起こらない	恩田陸	KADOKAWA	913.6

60	金は大事だ。愛も平和も金で買えることを、小窪律は知っている。それを教えてくれたのは、父と、母と赤の他人の老婦人だ。その彼女に会いに、今日は鎌倉へ行く。	黒猫邸の晩餐会	嬉野君	講談社	913.6
61	最近、友情という言葉をあまりきかなくなった。そもそも、情というものが嫌われる時代である。湿っている。じっとりと肌にまとわりつく感じがする。合理的でない。古くさい。などなど、感覚的に否定する人が多い。	とらわれない	五木寛之	新潮社	914.6
62	明治何年かわからないが、英国人のコックがわが国の宮廷の台所に入りこんで西洋料理の技術を伝授し、それが町の中にも流れたものだろう。私の幼い唇に入った西洋料理は今になって思うとたしかに正式の英国料理だったようだ。	紅茶と薔薇の日々	森茉莉	筑摩書房	914.6
63	JR品川駅臨時ホームに立っている少女は、携帯電話を閉じてスクールバッグのポケットに入れ、その手で白とミントグリーンの小さな箱を取り出した。	まちあわせ	柳美里	河出書房新社	913.6
64	日本は最近、元気がない。経済のせいだ、と思っているひとが多い。そういう問題ではない、と思う。	げんきな日本論	橋爪大三郎×大澤真幸	講談社	210.04
65	昭和の終わりから平成のはじめにかけての数年間、大学生だった私は東京で暮らしていた。そのころは一般的に、「昭和」はまだ「歴史」とは認識されていなかったと思う。	昭和史跡散歩 東京篇	一坂太郎	イースト・プレス	291.3
66	一〇年以上前、『じみへん』のなかで、「仕事場にものがない漫画家、五本の指に入る」と書いたことがあったんです。それで『ビッグコミックスピリッツ』の公式サイト「SPINET」で仕事場の写真を載せたんですが、けっこう反響がありました。	もたない男	中崎タツヤ	新潮社	159
67	霜月十五日は、手許の茶湯手帳で見ると、生コンクリート記念日、きものの日、こんぶ・かまぼこの日だそうだが、それはまあ私にとってはどうでもいい。七五三も関係ない。私にとって大事なのは、この日が「狩猟解禁」の日ということ	鬼平先生流「粋な酒飯術」	佐藤隆介	小学館	596
68	79分56秒。レフェリーのジェローム・ガルセスが長い笛を吹いて、日本にペナルティキックが与えられた。デジタル表示の時計は停止している。場所は、南アフリカのゴール前。得点は29-32.ゴールラインまであと5mだ。	桜の軌跡　ラグビー日本代表苦闘と栄光の25年史	グラフィックナンバー	文藝春秋	783.4
69	女学生たちの物語に入る前に、私たちとチンチン電車秘話との出会いについて、すこしばかり紹介させていただく。二〇〇三年三月半ばのことだった。広島テレビの報道記者だった堀川惠子は、キャップとして広島市政を担当していた。	チンチン電車と女学生	堀川惠子	講談社	369.3
70	次に出る映画はまだ決まってません。選んでる、なんて偉そうなことでなく、待ってる最中です。待ってるときっていちばんつらいんですよ。パソコンのコマーシャルに選ばれたのは、どう見ても僕がパソコンからいちばん遠いところにいるからじゃないでしょうか。	高倉健インタヴューズ	高倉健	小学館	778.21
71	私がイギリスの美しい家並みに魅了されたのは、バックパッカーで初めてイギリス旅行を決行した大学生の時。そして二度目は、二十代で離婚後、赤ん坊だった娘と共に再び訪れた時だ。	突撃！ロンドンに家を買う	井形慶子	筑摩書房	365.3
72	戦後の歴代総理大臣が、閨閥や高級官僚出身者といったエスタブリッシュメントに支配されているなか、尋常高等小学校（現在で言う中学校）卒という田中角栄の「学歴」は極めて異色と言えるだろう。	田中角栄という生き方	別冊宝島編集部	宝島社	312.1
73	一飲み下り開始地点「奥多摩」にてさっそくがぶ飲みする	多摩川飲み下り	大竹聡	筑摩書房	596
74	東日本大震災からまだ1週間しかたっていなかった2011年3月19日、わたしが勤めていた大学の卒業式が中止になった。理由は、「安全確保」のためとされた。それでも卒業式をやりたいという学生からメールをもらい、わたしは工事が終わったばかりの食堂での「自主卒業式」に参加した。	丘の上のバカ	高橋源一郎	朝日新聞出版	304

75	アルフレッド・アドラー（1870～1937）の説いたアドラー心理学を、ぜひ普通の働く人にこそ、とり入れてほしいと思う理由が3つあります。それは、「常識的であり、健全」「わかりやすい」「取り組みやすい」です。	働く人のためのアドラー心理学	岩井俊憲	朝日新聞出版	336.04
76	もし私の国の人びとが私を必要とするときが来たなら、私が彼らのために私の務めを果たすようあなたが助けてくれますように	世界を変えた10人の女性	池上彰	文藝春秋	280
77	二千点以上も描かれたゴッホの作品で、生前に売れた作品は一点しかない。今では名画の代名詞となったゴッホの作品も当時はまったく理解されず、絵を売ろうとしたゴッホが、値段を五〇フラン（約一万三千円）から五フランまで下げても、誰も欲しがらなかったという。	謎解きゴッホ 見方の極意魂のタッチ	西岡文彦	河出書房新社	723
78	伊藤若冲が鶏を画いた画人ということは普く知られているが、然らばその伝記はというと一向に分からない。	若冲	澁澤龍彦	河出書房新社	721.4
79	成長、増加を願う気持ちは、全人類に共通のものであり、本来的に備わったものなのだ、ということをまず理解していただきたい。現在よりもっと多くのものを欲しくなるのが人間の当然の感情なのである。	チャンスは無限にある	アールナイチンゲール	きこ書房	159
80	インドでの買物がおもしろいですね。これは、インドばかりでなしに、東南アジアやアラブの諸国でも同じですが、そもそも商品に値札が付いていません。客がお店の人に、「ハウ・マッチ（いくらですか？）」と問うところから、商談が始まります。	気にしない、気にしない	ひろさちや	PHP研究所	159
81	いつでも北に逃げたい。私は。 南の開放感、暖かさ、ほんとにいいものです。旅行でおとずれた春の沖縄は気持ちよかったよ。タイもよかったね。弛緩してた。	逃北　つかれたときは北へ逃げます	能町みね子	文藝春秋	291.09
82	日本語は世界でも有数の、「豊かな表現力」を有する言語のひとつといわれています。でも最近は「若い人がつかう日本語の語彙が減ってきている」などという意見をよく耳にするようになりました。	美しい「日本語」の言いまわし	日本の「言葉」倶楽部	三笠書房	814
83	「スイス人と本当に友達になれたとしたら、それは運のいい人だね。」チューリヒに住むドイツ人Fは、ちょっと皮肉を交えてそういった。「スイス人は、礼儀正しいが、よそ者と親しくなることは滅多にないんだ」	世界一豊かなスイスとそっくりな国ニッポン	川口マーン惠美	講談社	302.345
84	「ハーバードでいちばん人気のある国は日本なんですよ」現地の日本人留学生たちは口を揃えていう。ハーバードの一年生は、毎年春になると研修旅行に参加するのが通例となっている。研修旅行の行き先は、インド、イスラエル、イタリアなど約10カ国。その中でいちばん人気となっているのが、日本だ。	ハーバードでいちばん人気の国・日本	佐藤智恵	PHP研究所	3335.21
85	卵は冬場57日間、生で食べられる	賞味期限のウソ　食品ロスはなぜ生まれるのか	井出留美	幻冬舎	498.54
86	「極意」とはその道を極めた者だけが知る究極の技を言うのだろうが、実はそれは技術的な技よりもむしろ精神的な心構えであることが多い。そうした精神的な心構えを修行により体得することが「極意」となる。	落語に学ぶ大人の極意	稲田和浩	平凡社	779.13
87	時代はどう変わっていたのか 長い夜だった。2016年11月8日。 私を含めて多くのアメリカの、いや世界中のメディアや専門家がヒラリー・クリントンの勝利を予想する中、投票は東海岸から順次締め切られ、開票が始まっていった。	トランプ大統領の衝撃	冷泉彰彦	幻冬舎	314.89
88	日本の発酵調味料、とりわけ醤油や味噌、魚醤などを語るには、まず塩の話をしなくてはなるまい。というのは、塩は人間にとって不可欠の生理機能成分であるが、「食べもの」という観点から見ると、塩っぱい味をもたらしてくれるだけでなく、腐敗菌を寄せつけないので、保存料にもなる重宝なものであるからだ。	醤油・味噌・酢はすごい　三大発酵調味料と日本人	小泉武夫	中央公論新社	588.6
89	中国人にとっての“楽園”―それは日本だった 二〇一五年の流行語大賞に輝いた「爆買い」。それを象徴するように、同年の訪日中国人観光客は約500万人に達し、一六年も前年を超える勢いで増加している。	中国人エリートは日本をめざす	中島恵	中央公論新社	377.6

90	山登りをしてみたい、と思ったことはありますか？それはどんな山ですか？エヴェレストみたいな凍って高い山？緑の湿原台地が遠くまで続く爽やかな山？行ってみたいな、と思うその想像の中の風景は天国のイメージに近いことが多いです。	冒険登山のすすめ　最低限の装備で自然を楽しむ	米山悟	中央公論新社	786.1
91	「自分を過度に良く見せようとする“演技性パーソナリティ”の人が増加傾向にある。そういう人たちが主役となり、普通の人たちが騙されやすい時代がやってくる！」	自分を「平気で盛る」人の正体	和田秀樹	SBクリエイティブ	141.9
92	政府の資産は国民共有の財産です。しかし、その金額を知る人はあまりいません。「国の借金が一〇〇〇兆円」という数字は、マスコミなどによって繰り返し刷り込まれているのに、どうして資産の金額については誰も知らないのでしょう？	財務省と大新聞が隠す本当は世界一の日本経済	上念司	講談社	332.1
93	小学生に「東京は何で城がないんですか？」と聞かれたことがある。皆さんはこの無邪気な質問にどう答えるだろうか。	江戸はスゴイ　世界一幸せな人びとの浮世ぐらし	堀口茉純	PHP研究所	213.6
94	ありえないようなウソをつき、常人には考えられない不正を働いても、平然としている。ウソが完全に暴かれ、衆目に晒されても、全く恥じるそぶりさえ見せず、堂々としている。	サイコパス	中野信子	文藝春秋	493.7
95	私は珍樹ハンターである。幹や枝などに現れる動物やキャラクター、さらには芸能人や政治家の顔の表情にそっくりな模様や形を「珍樹」と呼んで、公園や森などを日々探索しながら、それらをカメラに納め続けている。	珍樹図鑑	小山直彦	文藝春秋	653.2
96	パリピは必ずしも「チャラチャラしたリア充の若者」とは限りません。・・・・・パリピは既に巷で流行っているものをミーハーに追いかけるのではなく、海外セレブや国内の一部で流行っているものをいち早く見つけ出す嗅覚を持ち、それを自分のものにしてマスコミに対して伝道する役割を持っています。	パリピ経済　パーティーピープルが市場を動かす	原田曜平	新潮社	36706
97	道徳は失われたのか 「このごろの子どもたちは、自由をはきちがえていて、口先ばかりで実行がともなわない。また自由、自由とばかりいって、責任ということを考えない。これでは、放任の教育だ」	みんなの道徳解体新書	パオロ・マッツァリーノ	筑摩書房	371.6
98	島耕作はいかにして島耕作となったか オフィスラブがはじまりだった	島耕作も、楽じゃない。　仕事・人生・経営論	弘兼憲史	光文社	726.1
99	学生時代に聞いて、耳に残っている話がある。・・・・それは、次の性別に基づく四通りの人間関係の比較である。 男にとって男は「力」 男にとって女は「美」 女にとって男は「気はやさしくて力持ち」 女にとって女は「謎？」	モテる構造　男と女の社会学	山田昌弘	筑摩書房	367.2
100	がんばっているのにつらいことが多い。 誠実であるがゆえに生きるのが苦しい。 そんなふうに感じている人の心の底には無価値感が横たわっている。無価値感ゆえに「価値ある自分にならなければ」という思いが、つらい努力に駆り立てているのである。	「自分には価値がない」の心理学	根本橘夫	朝日新聞出版	141.9
101	上げ底された明治の偉人 【福沢諭吉・・・・・】「明治の偉人」といえばこの人である。明治最初のベストセラーと言われる『学問のすすめ』の著者であり、それ以前は咸臨丸で太平洋を渡ってアメリカに行き、慶應義塾を設立し、事業を興した。	本当に偉いのか　あまのじゃく偉人伝	小谷野敦	新潮社	280